



環境大臣賞

命を守る未来の防災

いわき市立中央台北中学校
しらど ひろと
白土 大翔

3月11日、今年もまた黙とうをした。小学生になるまでは、この日に手を合わせる意味が分かっていなかった。黙とうをしながらいつも思い出すのは、津波に流されてめちゃくちゃになったパトカー。このパトカーを僕は小学4年生の時に、「富岡アーカイブミュージアム」で見た。暗い部屋の隅に展示されたそのパトカーは、車の原型はほとんど無く、泥だらけで、私はただただ恐怖でしかなかった。子供ながらに大変なことが起きたのだろうとは感じることができたが、震災のあの日、何が起こったのかを理解することはできなかつた。

中学生になった今、もう一度訪れてみた。大地震による大津波が町をのみこんでいったこと、原発が爆発し、住み慣れた町を離れなくてはならなかつたこと。震災遺産が物語ることを受け入れることができた。同時に、小学生の私と中学生の私とでは、同じものを見ても感じ方が違うのだと思った。

ただ、小学生や未就学児に震災の出来事を見せたり、聞かせたりしただけでは、恐怖しか残らないことがある。戦争や震災も、私たちが教訓として覚えておかなければいけないことには必ず恐怖がついてくる。人の記憶は、恐怖と結びつくことで忘れる事のできないものになるらしい。それは「トラウマ」と一緒だ。私たちが震災を学ぶのは、震災で起こったことを忘れなすこと。そして、一番大事なことは、これから起こる震災に向けて備えをすることではないだろうか。これから震災のことを学ぶ子供たちに、恐怖であお

るのでなく、楽しく学べる工夫はできないだろうか。

楽しく学べる工夫として私がやってみたいと思ったことを提案する。

1つ目は、「津波と鬼ごっこ」。現在、AR(拡張現実)での津波の恐怖体験は実施されているが、私は、AR(拡張現実)・VR(仮想現実)・プロジェクトマッピングでプログラムされた映像で、津波のスピード、高さを体感しながら「走って逃げる」、「上に逃げる」を実践できるようにする。鬼ごっこなので笑いながら走ってOK、鬼(津波)に捕まつたら負けと遊び感覚で実践する。

2つ目は、「震災サバイバル」。サバイバルといつても実際には公民館等の広い施設を利用し、家族参加型で実施する。今備えてある防災リュックを持ち寄り、子供から高齢者まで実際に生活している家族構成で参加してもらう。「水道が止まってしまった」、「電気が止まってしまった」などの震災で起こるあらゆるシチュエーションをもとに、家族で考え方行動してもらう。食事はどうする？ トイレは？ などのクイズ形式で乗り越え方を考えてもうらう。防災リュックの中身を使ってもよし、代用品を探してもよし、失敗してもよし。頭と体を使って体験し、学ぶ機会を作る。ゲーム感覚で楽しみながら、家族一丸となって学ぶ。防災リュックの中身もきっと変わらうと思う。

私たちは災害から逃れることはできない。だからこそ、いつ起こるかわからない災害に恐怖を抱くだけでなく、命を自分で守れるような教育が必要である。そして福島に生まれた私たちこそ、こうした方法を広めていく役割を負っている。今後も私はこうした方法を考え続けていきたい。